

第7回富山文学の会研究大会

八木光昭先生講演抄録

大きなテーマを三つ

富山文学と私との関係は、資料の開拓、基礎的な文献収集というところから始まっています。そして、富山の近代文学研究に少しはめどをつけています。そして、富山の近代が富山に参りましたのは今から35年くらい前です。もともと東京生まれ東京育ちで、永井荷風の研究、耽美派の研究を中心にやっていたので、地方とは全く関わりがありませんでした。しかし、富山に縁があつて来ましてから、非常におもしろい思いをしました。私のような東京生まれ東京育ちで東京文学ばかりやっていると、見えないものがたくさんあります。富山文学を少し真面目に勉強し始めると、いろいろなこと気が付き始めます。それがすごく面白かったのです。

どういふことかと言いますと、私の研究は明治30年代後半から40年代が中心で、特に耽美派系統に関心を持っていました。ですが、その辺りのテーマで研究を進めるにあたって、直接関係ない地方文学の勉強が何かとヒントになりました。私の師匠、池田弥三郎先生も、「文学研究は自分の専門ばかりで押し通しても駄目だよ」と、よく言われていました。「具体的にどういふことですか、もう少しわかりやすく教えていただけませんか」と尋ねると、「研究者は3本の縄を持ってないと駄目だ。研究の筋みたいなの追いかけていく大きなテーマを三つくらい持っていないとまっとうな研究はできないだろう」とおっしゃいました。三つの糸とか、縄がうまく撚られたときにいい論文ができてくるものだろうということでした。

魚津に来てから道楽として釣りを始めました。海釣りに

誘ってくれるセミプロがおりまして、小さな二人乗りのボートに小さな船外機を付けてまして、海に出て行きます。ボタがって、魚群探知機などの科学的な文明の利器はないわけです。彼は長年の経験によって、この場所でカサゴを大釣りしたぞ、このアマダイをたくさん釣ったということを書いていくのです。

ご承知のように漁師は山立てということをしします。海には目印がないので、ここは海の中のどの位置にあるのかというのを、山を見て確かめます。この点、富山県というのは便利ですね。海岸線に一本松があつて、一本松の先に僧ヶ岳の頂上が合わさる線の延長線上に自分はいらる、あるいは、一本松から毛勝岳の山頂が見える、その延長線上に自分たちはいる、というように把握できます。これは一本線だけでは駄目なのです。もう一本、別の方角で、何々の社屋のビルのでつぺんのところと後立山連峰の旭岳の頂上が一本になった線と交わったところに自分がいるということとを同時に見定めてはじめて自分の位置が確定します。よく釣れたその地点に再度来るにはその二つの線を正確に合わせるわけです。こういう風にして山立てをします。もちろん、その山立ての線が複数であれば複数であるほど、海上で非常に正確な位置が把握できるわけです。

それと同じように、さっき3本の縄というような言い方をしましたが、あるテーマを三つの視点、あるいは五つの視点からそこに焦点が合わさったときに、非常に面白いことに気が付いてくるし、焦点が合ったところのものが3次元的に見えてきます。このようなことで、富山文学を勉強することが本来の自分の勉強の進化にもつながっていったような思いがしました。

テキスト集め富山文庫に

私は、富山県人になつたのだから、富山県人らしく生き

よう、富山県人として死のうと思っています。そのためには、富山県というのとはどんな風土を持って、どんな人たちが住んでいるのか、その心はどんな心なのか、やっぱり知りたいわけです。早く富山県人になりたい、富山県文学を真面目に考えてみようと思いました。

私の場合、研究対象は古典ではなく近代文学です。明治以降の富山文学をきちんと読んでいこうという思いが深くなっていました。しかし、テキストが手近にありませんでした。誰を研究しようとしてもテキストがない時代だったので、古本屋の目録や古書展覧会の目録を見て注文を出したり、地元の古本屋さんを回ったりして、手当たり次第に集めることから始めました。最初は名前や存在くらいは知っていても、どんなものなのか内容も分からずに、後々読みたくなるものだろう、必要になるものだろうという思いだけで、富山に関連していそうなものを何でもかんでも注文していました。それが積もり積もって、県立図書館に入っている富山文庫の基礎となったのです。

最初はポケットマネーで買うことから始まったのですが、洗足学園魚津短期大学の学長が見識のある方で、これは短大だけではなく富山県にとっても財産になるだろうと、予算をかなりつけてくれるようになりました。かなり充実してきた段階で、残念ながら富山文庫も洗足学園魚津短期大学の閉学と同時に収集が途切れてしまいました。県立図書館に移管ということになりましたが、県立図書館でも鋭意補充していくという約束でしたし、実際に少しづつ充実してきているのは喜ばしいことだと思います。ようやく富山文学研究ができると言ってもいいような段階になってきたと思います。しかしながら、あるテーマ、富山県関係作家、あるいは作品を深く掘り下げた研究が発表されるといふ段階までは、まだ至っていないのではないかと思います。存在は知られたし、概要も分かっています。基本的に読みたいテキストは手軽に求められるように

もなってきました。さあ、本格的な研究の段階はこれからだという思いがあります。今日、お招きいただき始めた富山文学の会は第7回、ようやく本格的な研究がなされ始めて、7年が経っているのだなとうれしく思っています。

今日は、富山近代文学史の全体を振り返ってみたいと思います。「郷土の文化」は太田先生が中心になって発刊されている、大事な文献雑誌で、富山文献資料を知るには大変大事な資料です。「郷土の文化」に載せられた富山文学史の年表を使って、今、どの程度のことがかつてきているのかを再確認したいと思います。年代順にどのような状況か、これからの視点で研究が期待されるのか、資料はどのようなものが残っているかについて触れていきたいと思います。

全集が完成した横山源之助

最初は横山源之助です。明治27年、県人による初の近代小説「貧しき小学生徒」、明治32年には『日本之下層社会』を発表しています。源之助に関する研究は、非常に便利になりました。立花雄一さんのご努力で、新版の『横山源之助全集』が完成したおかげです。一昔前に、明治文献の『横山源之助全集』が全5巻で企画されましたが、5巻の企画中出たのは2巻だけで、3巻は未完で終わってしまいました。2巻の既刊分というのは、単行本で出版されたものばかり、そう稀覯本でもなく、図書館で見ることができません。それまで困っていたのは、横山源之助はたくさんの著作が有りながら、それらが手軽に読めず、全貌が分からなかったことです。そのために、源之助の研究は遅れていたわけなんです。私などが源之助を調べ始めたときは、国会図書館に相当通いました。例えば「貧しき小学生徒」も『家庭雑誌』という古い雑誌からコピーを取ってこざるを得ませんでした。しかし、源之助の新版の全集が出たことによって、こ

れから研究が大いに進むと思います。

横山源之助は、どういふ人物なのかを一言で答えるのは難しい。よくルポルタージュ作家とかジャーナリスト、あるいは社会運動家などと言われています。しかし、横山源之助の業績の全貌を頭に入れた上で、彼は結局どんな人だったかというのをうまく説明してくれた人はまだいません。それをこれから期待したいと思います。

彼は「貧しき小学生徒」という唯一の小説を書いた明治27年（小説は9月ですが）12月に毎日新聞社に入社して、いわゆるルポ作家としての活動を開始します。明治27年12月、最初のルポルタージュ「戦争と地方労役者」を書いていきます。したがって、小説1本書いただけで、すぐにその年の暮れにはルポルタージュ作家として、新聞記者としての活動が始まります。「貧しき小学生徒」は附けたりというか、なんか異質のように感じます。大雑把に言ってしまうと、横山源之助のテーマは「貧」の研究、世の貧しさとは何か、貧しさの本質を知り、その貧からの脱出、脱却の方策を探るといのが生涯のテーマでした。その出発にあたって小説に書いてみたところでそれがどれほどのものかということだと思えます。自分の思い、それを小説に作り上げたとしても、どれだけ社会を動かせられるか、どれだけ貧者の助けになるか、そんなことを考えると、彼には面はゆい思いが募ったのではないでしようか。彼のその後の業績をたどってみると、小説家として生きていくような生ぬるさでは、彼は耐えられなかったのでしょうか。

そのルポの始まりというのは、基本的に貧民窟の探求です。彼のルポの前、明治23年8月には新聞『日本』の記者で桜田文吾が「貧天地飢寒窟探検記」を連載、後に単行本も出ています。松原岩五郎のルポも『国民新聞』に明治25年に載ります。したがって、貧民窟の探検、記録というのは明治27年に始まった横山源之助のルポの前にもあるのです。しかし、後々『日本之下層社会』にまとまるような彼の

東京の下層社会のルポとは決定的に違うところが一つあります。それは最初の「飢寒窟探検記」の題名にあるように、探検なのです。一般の人々から見るのと想像もつかないような貧しい生活をしている、その下層民がどんな暮らしをしているか興味本位のところがあり、それで探検対象とするのです。下層民は自分たちと違う人種という思いが基本的にあります。しかし、源之助の場合は違います。穢多非人を見るような目で貧民窟を見て歩くのではなく、同じ人間として同情しています。車善七や弾左衛門とかを頭にあだく穢多非人の社会の延長として、何か閉ざされた得体的にしない世界を探検しようというのではありません。

明治27年というのは、エポックメイキングな時代です。日清戦争が起こり、それを境にして日本の社会はガラッと変わっていきます。資本主義体制が確立されていく中で、日清戦争の前と後で明治の社会がかなり変わります。貧富の差が非常に激しくなります。源之助は、都市下層民から出発し、職人、職工、そして農民、特に小作人を下層民として着目して行くことになりました。

同じく探検興味によるもので、貧民窟を探検した記録がもうちよつと前にあります。呉文聡という人が明治24年に発表した「東京府下貧民の状況」です。これが発表されたのは、『スタチスチック雑誌』という雑誌です。スタティスティック、つまり統計学です。呉文聡は日本で初めて統計学という考え方を普及させた人です。なぜ、このことに触れるかと言うと、横山源之助は下層社会のルポにおいて統計を重要視しているのです。何人いるのか、残飯がいくらか、明確な数字を挙げて、下層民の生活状況を報告しており、非常に説得力があります。したがって、源之助の下層民のルポというのは、近代的な社会学の研究に入っているのです。興味本位の記録ではなく、志自体が違います。そんなところに留意しながら源之助の生きざま、業績を追いかけていく必要があると思います。

統計的手法などを取り入れ、社会の見方も近代的になりました。東京から地方、全国へとという視点の広がりもありました。『日本之下層社会』にまとめられたものがその最初の成果だと思えます。東京の最下層の民の研究が始まりましたが、やがて、足利や桐生などの製糸女工の貧困情勢、それから大阪のマッチ工場へと調査が広がりました。この当時の日本のマッチ輸出は非常に大事でしたが、ひどい貧困層が関わっていました。そのルポです。福井あたりの綿織物も取り上げています。

このように、彼は東京の一部分の特殊な人たちだけでなく、全国に目を向けて資本主義体制が確立されていく中で、貧困から這い上がっていかれない下層民に目をつけていきました。その辺りの大局を見据えながら、横山源之助を掘り下げていったのだと思います。

富山文庫には基本的な単行本は集めてありません。稀覯本なのは、『南米渡航案内』です。本当に珍しくて、収集している長い間の中でも、古書目録で見ただけでなく、これを手に入れた時は小躍りして喜んだほどです。源之助は晩年になって、貧民を救済する一つの手立てとして移民を考えていました。貧民が新天地に行つて新しく生きる可能性に賭けようとしていました。実際に彼はブラジルまで行つて調査したと言われています。どうやったらブラジルに行つて、どのような方法だったら生きていけるかをまとめたのがこの本です。

源之助に関しては研究を深めようと思えば深められる段階に來ています。

泉鏡花の文学性が見える富山物

次は泉鏡花です。鏡花に関しては、隣の石川県、福井県に専門の研究者が大勢います。上田正行さん、小林輝治さん等、福井大学の越野格さん、金沢学院大の秋山稔さんと、

日本近代文学会の北陸支部が置かれている金沢には鏡花の研究者が多士済々そろつています。彼らがよく言う泉鏡花の富山物は、富山関連作品というのですが、それに関するの研究は今一つはかどつていません。

富山物というのは、まとまりがあり、泉鏡花の文学性を典型的に見ることができるので、そこに着目してほしいと思います。特に、富山物は大家として名が出てくる前の初期に集中しています。彼の作品作りのプロトタイプというものがほの見えると思います。それが一つの利点です。作品には富山の秘境が選ばれています。例えば小川温泉元湯、俱利伽羅峠、立山……。彼は秘境好きで、人が行くのが大変なところが舞台になっていることが多い。そういう所が富山県には多く、それも全県的に選ばれています。

そして、その作品を概観すると、何か面白い共通するものが見えてきます。例えば、泊駅から出発して小川温泉まで行くというのは現実にあることです。しかし、現実の世界から出発して、それがだんだん非現実なことに変化していくのです。距離にしても、最初は距離記述が合っています。だんだん変わってきます。そうして、自然と我々を魔界に誘い込んでしまうという手法を用います。小川温泉を舞台にした「湯女の魂」は典型的です。彼の独特の技法、現実から夢の世界へ、その典型が見えます。

彼の文学的な世界で大事なものは、その土地その土地に根付いた口碑、伝承、噂話、稗史の活用です。昔話や伝説が彼の頭の中には詰め込まれており、富山におけるそういうものが彼の富山物の中にも出てきます。小林輝治先生の研究というのが、金沢の昔話や伝説を収集し、それと鏡花文学との関連を明らかにされてきました。しかし、富山の昔話や口碑、伝説の類を広く積極的に収集したという業績は少ないですね。ですから、多少不便です。

「蛇くひ」という作品がありますが、今一番進んだ研究をされているのは立野幸雄さんだと思います。桂書房から

出た『越中文学の情景』でも触れてありましたが、彼の博士論文には詳しい論考があります。「蛇くひ」には應と博う集団が出てきます。それになぜ鏡花が着目するのかが説明は難しいと思います。もし、何か記録みたいなものが見つかれば面白いと思います。「湯女の魂」でも、小（しよ）川（せん）山（ざん）の妖怪というのが出てきます。小川温泉元湯の縁起、温泉ができた由来に小川山が出てきます。小川とは何かというと、魚津市の小川寺からで、そこから泊まで温泉が飛んできたのだと言うのです。鏡花の念頭にこれが入っていたかどうか。一般的に富山の史料や噂、口碑、伝説にどんなものが残っているか調べようとすると、資料が乏しいですね。しかし、富山物はそのような謎解きの可能性もあって、面白い鏡花論が書けるかなと思います。

鏡花は法華経を読み込んだ人だという研究もあります。上田さんの研究には「葉草取」と法華経との関連性を掘り下げた論文があります。法華経の中に、鏡花の幻想の源泉になるようなエピソードがないかどうか調べ直してみても面白いかもしれません。

研究が遅れている三島霜川

さて、三島霜川は大変です。明治書院から出ている明治編、大正編、昭和編1、2の4冊本で近代文学の年表として一番詳しい『現代日本文学大年表』の明治編をばらっとめくっていくと、三島霜川の名前がよく出てきます。おそらく年表に載っている明治の小説家の中で、三島霜川は作品が3本指に入るくらい多いでしょう。すごい多作家なのですね。

ところが、総じて三島霜川の研究は遅れています。一昔前の段階で後期硯友社文学の研究というと、伊狩章さんの名前が出てきますが、伊狩さんの研究でも三島霜川のとは

ろは力が入っていません。以降、三島霜川の研究となると、真正面から取り上げられてきませんでした。

唯一例外が富山大学の旧教育学部の佐々木浩先生の研究です。確か『富山大学教育学部紀要』の昭和50年代から平成5年ごろにかけて十数本載せていらつしやいます。どうしてこれが1本にならなかつたのだろうとの思いが私にはあります。佐々木先生は、もうちよつと、もうちよつととおつしやっていました。もう少し研究が進んで、論文があると数本書ければ1本にまとめられるとの思いがあったのだと思います。

研究対象とするには、いま一つ、三島霜川は魅力が足りません。徳田秋声の陰に隠れた存在というか、金沢の陰に隠れた富山みたいな感じですが。後期硯友社の中では非常に大事な作家なのに、三島霜川は二の次、三の次にされてしまっています。そうならなかつたのには訳があつて、彼の文学がそう高く評価できないからでしょうね。私から言わせれば、三島霜川は実際作家だと思いません。

実際作家というのは、その時代その時代のトピックスを作品にあえて取り上げて大方の喝采を狙います。例えば、学校でいじめ問題が騒がれ始めるといじめ問題をテーマに小説を書く。老人介護の問題が問われ始めるとそれをテーマに小説を書く。有名野球選手が薬物中毒になったら、それで作品を書いてみようとするのです。

彼が力を入れて書いたと思われるものでは、例えばキリスト教信仰の問題など、みなその当時の重要なテーマを扱っています。「虚無」という作品もそうで、ニヒリズムを謳いながら、その実、明治30年代半ばから顕著になる共通テーマである青年の悲哀を扱っています。多くの作家が悲哀をテーマに小説を書いています。そういう文学の風潮が見えてくると悲哀をテーマにして書くのです。そういう人なのですね。だから信用が置けないのです。

それから、秋声の作品の多くを霜川が代作していたら

うという代作問題があります。執筆態度に戯作者のような要素があつて、一筋縄ではいかないのです。人間的にもおかしな人だつたようです。年中お金が足りなくて、僅かな借金をするために、人力車に乗って行くなど、奇行で知られています。でもそういう噂が残るということは、何か陰に面白いものがあるのでしょうか。そういう意味でも三島霜川の文献的資料を調べていくのは大事だと思ひます。

投書作品が残る斉藤素影

斉藤素影という人は、ほとんど知られていなかった人です。数少ない幸田露伴門下です。不思議なことに、富山の近代文学史を見ていくと、そんなに潤沢ではないけれども、近代文学史の重要な文学潮流の中には、誰かが頭を突っ込んでいるのです。例えば三島霜川は硯友社で、『青鞥』には尾竹紅吉が、というように。

斉藤素影の資料は、亡くなられてしまいましたが、息子の斉藤悦郎さんからまとめて洗足学園魚津短期大学の富山文庫に寄贈されました。幸いなことに、素影自体が手元にとつておいた『文庫』やその他の投書雑誌あたりから、『文芸倶楽部』まで、発表した作品の切抜きがスクラップされて残っており、それをそのまま寄贈していただきました。明治の作家ですから別号をたくさん持つていて、そのスクラップがなかったら、素影の作品と分らないものがありました。これは非常にラッキーです。これを散逸していたら、永久に闇の中に消えていった存在かもしれませぬ。寄贈していただいた中に、幸田露伴からの書簡が11通ありました。『露伴の書簡』でまとめて翻刻されていますが、露伴書簡の中で、個人で11通（全集所収数は51通）という数は抜き出しています。そういう意味でも貴重な存在です。

作品をさつと読んだ限りでは、そう大した作家とは言え

ないかと思ひます。しかし、素影を研究していくと、面白いことが分りそうだなと思ひます。この時代、明治20年代あたりから30年代にかけては、地方で文学に興味がある人物は、投書雑誌に投書することから始まる人が多く、斉藤素影もその典型です。これがもう少し詳しく分かっていると、どういう形で腕を磨き、文学技法などを身につけていったのか、文壇に出ていったのが判明していくと思ひます。ただ、資料が少ないので難しいかもしれませぬ。しかし、改めて追いかけると面白い研究テーマだと思ひます。切抜きを見ていて面白いのは、『北陸タイムス』に連載した作品があることです。新聞連載小説というのは、明治初期に、続き物と言われていました。続き物から始まって、新聞連載小説とされるまでに定着していきます。前段階だと講談の速記ものなどが残っていますが、そのような二流三流の戯作者程度の土台や下つ端の新聞記者が書いたような続き物が新聞小説の土台になっていったわけです。少し遅れて地方新聞の中でも文芸欄を設けたり、続き物、新聞連載小説を載せたりする時代になっていきます。それと素影の文業は重なりますので、その辺りで改めて地方の新聞を介在したところの文学作品のあり方が分かつてくると面白いなと思ひます。

富山県の新聞のテクストは明治40年代くらいからはかなりきちんと残っていますが、それ以前に発行されたものは散逸が激しくて、なかなか研究が進みませぬ。残っている限りのものをつなぎ合わせて何か出てこないかなと思ひます。これは富山近代文学史を考えたときに、触れざるを得ないとこの道と思ひます。だいたい初期の新聞、『北陸タイムス』、『高岡新報』もそうですけど、地方紙というのは中央紙に載つた「続き物」をそのまま載せることが多い。版權がどうなっているのかはつきりしませんが、そのため、その作品がその地方、富山の文学と直接関わりがあるのかは分りませぬ。その辺りを明らかにすることは面

白いテーマで、難攻不落かもしれませんが、やる価値はあると思います。

資料が充実している井上江花

井上江花は面白いですね。井上江花は、明治・大正、昭和10年くらいまでをカバーして、富山を代表するオビニオンリーダーだったのではないのでしょうか。このようなジャーナリストはなかなかいません。幸いなことに、彼が出版した『江花叢書』の復刻版が新興出版社から出ています。そして、『ある新聞人の生涯 評伝井上江花』という一つの評伝がまとまっています。ただ、この評伝はジャーナリストとしての面に焦点が当てられていますので、我々が特に興味を持つ文学者や文学との関わりの中ではインパクトに欠けるかもしれません。

彼の著作を繰っていくと、横山源之助や大井冷光と密接なことが分かります。特に、大井冷光は井上江花を追いかけたような文業を残しており、彼との関係は重い線です。

それから、『江花文集』というのがあります。これは、高岡市立図書館に1セットしか残っていないのではないかと思います。『江花叢書』に載らなかったその前のところを中心に、全7巻あります。これは自費出版したもので、自分の親戚や親友らに配っただけの、おそらく100部も印刷されていない少部数のものです。高岡市立図書館に所蔵されている『江花文集』がなくなってしまうとどうしようもなくなります。

井上江花は近代の目から富山県って何だ、どんな特徴があるかを改めて見直した人物です。何しろ、黒部川や立山の探検をやったり、大境の洞窟の発見、さらには郷土史の発掘、社会問題への切り込みなど様々な試みをやった人です。富山県全体を近代の目で見直そうというのを徹底

した人です。

去年、桂書房の勝山敏一さんが『明治・行き当たりレンズ』という面白い本を出しました。これは井上江花の家に残っていた、多分井上江花が写したであろう写真を使い、江花が書いた連載記事に解説を付けたものです。一枚一枚が、井上江花が見た通りの富山が写っているのが興味深い。このように、井上江花のことに關しては、だんだん分かってきたことが多く、資料もかなりあります。

富山文学は中央の流れに關連

ここまで5人取り上げ、この程度のこと分かってきているという現状をお話しました。結局のところ私が言いたいのは、ようやく資料が整ってきて、富山の文学は研究しようとするればできる状況になってきたということです。ぜひ、資料に挙げた20人程のうち1人でもいいですから、ちよつと読み込んでみようかなと思っただけです。面白い人物が20人の中に必ずいるはずですから、ぜひ追っかけてみてほしいです。

近代文学研究を専門として人間にとつて、富山文学の研究は決してマイナーではありません。地方文学の研究が中央文壇の流れや日本の文学そのものを考えるときに絶対にプラスになります。幅広い視点から近代文学を見ることで大事な気がします。積極的に富山文学を研究していただきたいと思います。

(2016年3月5日、於富山大学人間発達科学部)